

敦煌の旅

陳舜臣

陳舜臣

平凡社

敦煌の旅

昭和五十一年七月九日 初版第一刷発行
昭和五十一年十月十三日 初版第八刷発行

著者 陳舜臣

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四の一

郵便番号 一〇二一

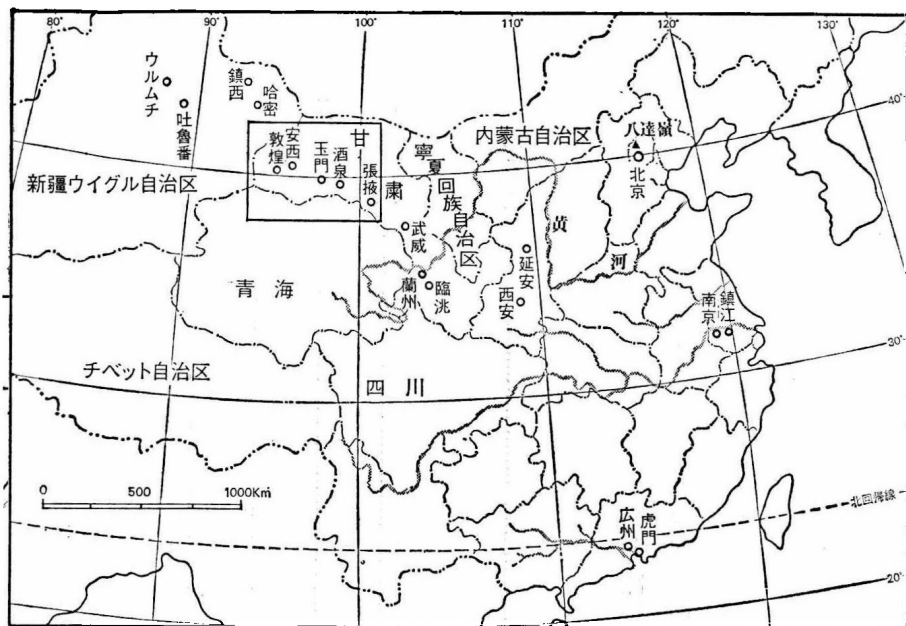
電話 東京(〇三)二六五—〇四五(代表)

振替 東京八一—九六三九

製作

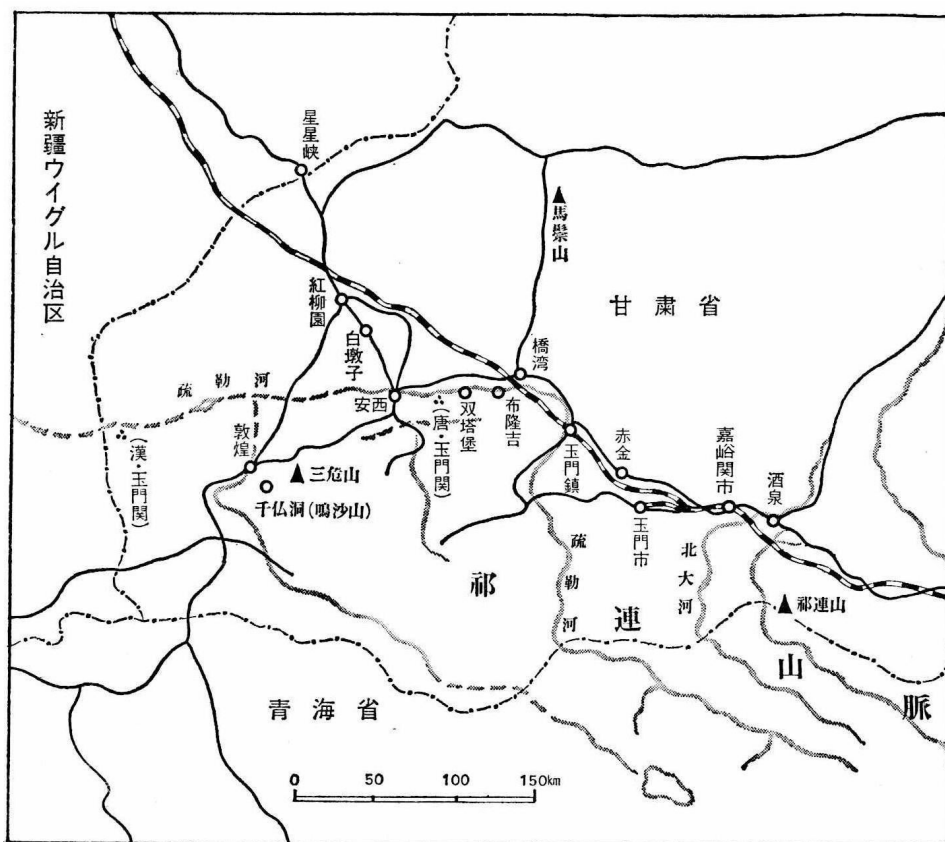
東洋印刷／東京印書館／石津製本所

不良本は直接小社サービス課でお取替え
致します(送料小社負担)。



- 国境
- 省境
- ==== 鉄道
- ハイウェイ





目

次

酒泉にて	三
嘉峪関を越えて	三五
塞外風光	四〇
鳴沙山へ	四七
敦煌の歴史	五九
前　　夜	一〇六
交脚菩薩	一四四
阿　修　羅	一四三
古寺残影	一五九
石窟寺の午後	一八二
秘宝顛末	一九六

文殊洞……………三六

南大仏……………三六

胡旋舞……………三七

帰路……………三五

あとがき……………三三

写真 陳立人

装幀 伊藤鑽治

敦
煌
の
旅

酒泉にて

1

敦煌^{とんぎ}への旅は酒泉から始まります。

これからが始まりなのに、酒泉のまちにはいったとき、とうとうたどり着いた、という気がしたものです。

酒泉はこれまで私の夢になんどもあらわれ、そのたびに私の胸をかきみだしてきたまちでした。たとえてみれば、灰色の砂漠に、どこから飛んできたのか、あざやかな桃の花びらが一枚、ふわりと落ちたかんじのまちです。まだ見ぬ土地を、なぜそんなふうに思い描いたのか、いささかふしぎといわねばなりません。

シルクロードの途上にあるまちなので、なんとなくロマンのかおりが漂っていたこともあるでしょう。でも、なによりもその地名がすばらしいではありませんか。——酒の泉！

紀元前一世紀ごろ、漢の武帝は黄河の西、現在の甘肅省西部の四つの主要なオアシスを直轄郡として、西域経営の基地にしたのです。漢の本部から西域へ通じるこのルートは、両地のあいだをかけた渡した長い廊下にたとえられ、「河西の走廊」とも呼ばれました。このいわゆる河西四郡は、東から西へ、

武威

張掖

酒泉

敦煌

の順にならんでいます。

武威などはいかにも軍事基地まるだしの命名です。張掖はどうかといえますと、

断匈奴之臂 張中国之掖

——匈奴の臂を断ち、中国の掖（腋）を張る。

という句に由来するそうですが、これまたおだやかならぬ地名というべきでしょう。

敦煌の地名の由来については、いろんな説があるようですが、つまりは「かがやかしい」ということらしく、やはり肩肘張ったかんじがします。

河西四郡のなかで、ひとり酒泉だけが、軍事臭も示威癖もなく、いたって優雅な響きのする地名

をもっているのです。ロマンチストなら、河西四郡から夢のまちを一つえらべといわれたとき、かならず酒泉をとるにちがいません。

じつは二年前、新疆ウイグル自治区のウルムチから蘭州へ飛んだとき、酒泉空港で約半時間、休憩したことがあります。そのとき私はできるなら酒泉のまちを見たいと願ったのですが、空港からまちまで片道でも半時間以上かかるというは、あきらめざるをえませんでした。

（あこがれの夢の土地は、見ないほうがいいのだ。……）

私は自分にそういいかせたものです。

二年たって、私はその酒泉のまちに足を踏みいれました。とうとうやってきた。——やはりそんな感慨がこみあげてきます。

このたびの旅は、私たち夫婦、息子、娘の家族四人で、前日の午後、北京空港から西安經由蘭州行きの民航機に乗りました。北京から旅行社の女性が同行してくれたので、総勢五人だったので。酒泉經由ウルムチ行きの便もありましたが、私たちはまず蘭州へいくことにしました。

戸籍調査ふうに敦煌の身分をいいますと、

——甘肅省酒泉地区敦煌県

であります。

日本の人はよくとまどうのですが、中国の県は日本のそれと違って、かなり下級の単位です。日

本では県のなかに市があるかんじですが、中国ではたとえば北京特別市のなかに十三の県があると
いったふうに、県は市の下に置かれます。

北京で買った地図帳の概況をみますと、甘肅省には、二つの自治州、八つの地区、四つの市、六
十六の県、六つの自治県、および二つの旗がある、と記されています。自治と名のついているのは、
少数民族の居住しているところで、甘肅省の二つの大きな自治州は、臨夏回族自治州と甘南チベッ
ト族自治州です。これを別格とすれば、市と同格の単位は「地区」で、六十六もある県はその地区
の下にあることになります。なお「旗」というのは、蒙古族のとくべつな行政区画で、ほぼ県に相
当するということです。

ともあれ酒泉地区のなかに、酒泉県や敦煌県など八つの県が含まれています。

元締めにあたる甘肅省の革命委員会の所在地は、蘭州ですから、順序としてそこへいくのはとう
ぜんでしょう。省革命委員会は私たちのために二人の案内人をつけてくださいました。それは外事
組の劉吉順氏と文化局の女性職員の劉静修さんです。どちらも劉姓なので、三十代の長身の劉氏を
「老劉」、小柄で若くみえる劉さんを「小劉」と呼ぶことにしました。この呼び分けが正しかったか
どうかは疑問です。あとで親しくなつて、いろんな話をしたところ、彼女が三十をすぎていること
すでに一児の母であることなどがわかりました。中国の女性は、年齢よりは若く見えるのですが、
お化粧をしないのがその一因であるとすれば、皮肉なことではありませんか。

いささか疑問をのこしましたが、いまさら呼び方をかえることもできません。それに、中国の「老」は、かならずしも年齢的に年をとっていることだけを意味しないのです。親しみを込めて呼ぶときに使われます。「老朋友^{ラオポンヨウ}」は年寄りの友人ではなく、ふるい親友という意味で、それが少年であってもさしつかえないのです。

蘭州で二人の劉さんを加えて、われわれ一行は七人となりました。

蘭州には帰りに三泊するスケジュールになっており、その日はホテルで食事をしたり、映画を鑑賞したりして時間待ちをしたあと、夜行列車で酒泉へむかうことにしたのです。私たちの乗る、上海発ウルムチ行きの急行列車は、零時十九分蘭州発ですが、みごと時刻かきりに蘭州駅をはなれました。

酒泉まで十八時間かかります。

私たち家族四人でコンパートメント一室を占領しました。広軌^{こうき}なので、日本の寝台車よりもゆつたりしたかんじです。列車が武威をすぎるところ、私はまだ夢のなかでした。停車時間の長い張掖駅では、プラットホームに降りてぶらぶら歩きました。二年前ウルムチへいったときも、やはりこの駅ではプラットホームに降りて散歩したものです。

こうして、私たちは河西の走廊を、レールのうえで走りながら酒泉へむかいます。

一九七五年八月三十日の午後六時、これまた定刻かきり、列車は酒泉駅に到着しました。私た

ちは出迎えのジープで、酒泉地区の招待所へむかったのです。

——とうとうたどり着いた。……

ジープのなかでも、私は心のなかでそうくり返していました。

2

漢の郭弘かくこうという人物は、たいそう酒を愛したそうですが、あるとき、皇帝からその志望をきかれたとき、

——封を酒泉に得ば、実に望外に出づ。

と答えたそうです。酒泉の殿様になれば、いくらでも酒が飲めるからと、かなりイキがって答えたのです。

おなじみ唐の大詩人杜甫とほ（七一二—七七〇）は、「飲中八仙歌」という詩のなかで、当時酒豪のほまれの高かった汝陽王（玄宗皇帝の兄の子）のことに言及して、

恨不移封向酒泉

——封を移して酒泉に向かわざるを恨む。

という句を用いました。

酒泉といえば、人びとはこのようなエピソードを思い出すでしょう。

その名をきいただけで、お酒飲みは胸をわくわくさせます。そんな地名をもったのは、酒泉という土地の福祿ふくろくでもありませんか。そういえば、酒泉郡の中心地は、漢代から三国時代にかけて、「福祿県」と呼ばれ、南北朝のころに、それをひっくり返して、「福祿県」と改称されたのです。

『甘肅通志』には、

——福祿城の謝文という者が新しく城を築いたところ、下に金泉があり、その味は酒の如くであったので、酒泉と名づけた。

という地名由来譚が紹介されています。

いまでも郊外に石で囲まれた方形の泉があり、いにしえのその酒泉のあとだと伝えられているそうです。

「でも、いまはもう酒の味などしません。二千年以上もたっていますからねえ」

土地の人は、にやにや笑いながらそう教えてくれました。日本でも、現代の養老の滝はもう酒の味などなくなっていますが、中国の酒泉もおなじであります。

二年前、酒泉空港で半時間ほど休憩したことは前に述べましたが、そのとき空港の女性の服務員が、旅客たちに酒泉の概況を説明してくれたのですが、そのとき彼女の話した地名由来譚は、右の